佐賀の林業

No.622
2008 秋号

平成20年11月1日発行●四半期1回発行●第622号

モクリン

第4回　がばいじゃーもく祭り（平成20年10月5日　伊万里木材市場特設会場）

目次

みんなの林政
県産木材利用推進プロジェクトの取り組み……2
佐賀県内における原木しいたけ生産の取り組み……4
森林の間伐等の実施の促進に関する特別措置法が制定されました……5
普及だより
唐津・東松浦地区の林業普及の取り組み……6
伊万里・西松浦地区の林業普及の取り組み……7
鹿島地区緑の少年団研修大会が開催されました……8
この町・この人
竹炭匠人・吉谷喜代美さん……9
森の名手・名人に認定されました　中山茂廣さん……9
林業試験場だより
マイクロカッティングによる新さし木生産技術普及講習会が開催されました……10
トピックス
第4回　がばいじゃーもく祭りが開催されました……11
佐賀の木材市況：平成20年7月～9月……12
頑張っています林業研究グループ「三瀬林業研究会」……12
編集後記……12

みんなの林政

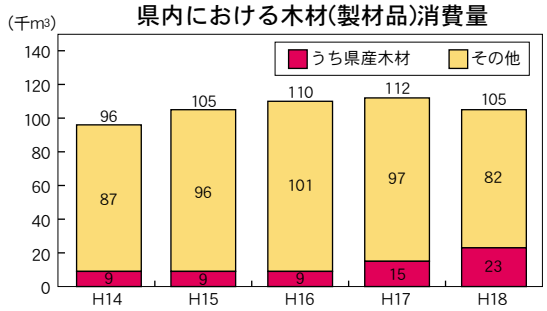
県産木材の安定供給体制づくりを進めています。「県産木材利用推進プロジェクト」の取り組み

1　はじめに

近年、県内の森林は、木材として利用可能な資源として充実してきているものの、木材価格の低迷や林業の担い手の減少から、十分に山の手入れがなされず、森林の持つ公益的機能の低下が懸念されています。

また、県内の木材（製材品）消費量は、105千m^3ですが、このうち県産木材の木材消費量は23千m^3と全体の22％にとどまっており、それ以外を県外からの移入材や輸入材が占めている状況となっています。

県内における木材(製材品)消費量



参考資料：県内全体の木材消費量　H14～16　農林水産省「木材需給報告書」
H17～18　建設資材・労働力需要実態調査、建託統計年報に基づく推計
うち県産木材の消費量　H14～18　農林水産省「木材需給報告書」等に基づく推計

一方、木材需要の大半を占める住宅等の建築分野では、阪神大震災を契機に建築基準法の改正や住宅の品質確保の促進等に関する法律が施行され、住宅資材のなお一層の品質確保が求められるようになっています。こうしたことから、反りや割れなどの狂いが少なく、品質の安定した乾燥木材への需要が高まっているところですが、県内の製材工場の多くは経営規模が小さく、木材乾燥施設を整備しているところも少ないため、安定的に乾燥木材を供給できない状況となっています。

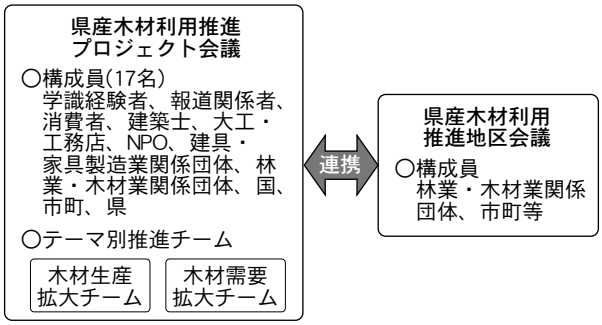
このような状況から、県産木材の生産から流通・加工、消費に至るまでの一貫した安定供給体制づくりを目的として、平成19年度から「県産木材利用推進プロジェクト」に取り組んでおりますので、その内容について紹介します。

2　推進体制

当プロジェクトは、県民、CSO（市民社会組織）、林業・製材業、行政等の県民協働により推進することとしており、プロジェクト全体を総括する「県産木材利用推進プロジェクト会議」及び、その内部組織として、テーマ別推進チームである「木材生産拡大チーム」と「木材需要拡大チーム」を設置しています。

また、各地区における県産木材の利用推進を図るため、「県産木材利用推進地区会議」を設置し、県産木材利用推進プロジェクト会議との連携を図っています。

県産木材利用推進プロジェクトの推進体制



3　取組内容

当プロジェクトでは、県産木材の「低コスト生産体制づくり」、「流通・加工システムづくり」、「木づかい運動の展開」、「住みたい木造住宅づくり」の4つ柱により、取り組みを進めています。

（1）低コスト生産体制づくり

県産木材の生産拡大を目的とした低コスト生産体制づくりとして、列状間伐等の低コスト間伐モデル地区の設定による団地化を進めるとともに、高性能林業機械の利用による素材生産コストの縮減などを行っています。

高性能林業機械による間伐作業

（２）木材の流通・加工システムづくり

県産木材の需要拡大を目的とした流通・加工システムづくりとして、県内企業の木材乾燥施設を共同利用して行う県産人工乾燥木材の生産技術の確立、県産乾燥木材の品質基準等を定めた県産乾燥木材認証制度の創設のほか、県産木材を使用した「こだわりのある家づくり」活動を行うグループの支援などを行っています。

木材乾燥施設による乾燥木材の生産

県産人工乾燥木材と認証スタンプ

（３）木づかい運動の展開

木づかい運動の展開では、県産木材利用の意義、木造文化などについての啓発等を行う木づかい塾、県内の小・中学生とその保護者を対象とした

木づかい塾（木づかい講演会）

日曜大工教室

木工教室、県民を対象とした日曜大工教室などを開催しています。

（４）住みたい木造住宅づくり

住みたい木造住宅づくりでは、県産木材を使用した家づくりの推進、大工・工務店等を対象とした木造住宅の普及・啓発を行っています。

県産木材を使用した県営住宅

４　おわりに

今年度は、県産木材の生産拡大や利用拡大を支援し、PRしてくださる企業や団体等を募集・登録するとともに、県内の大工・工務店等が県産木材を容易に調達できるよう、認証された県産乾燥木材の在庫情報をホームページ等で紹介するなど、県産木材の生産から流通・加工、消費に至るまでの一貫した安定供給体制づくりに向けた取り組みを行っていきたいと考えています。

県産木材利用推進プロジェクトの詳細については、「よかウッド」のホームページでご覧いただけます。【 http://www.yoka-wood.jp/ 】

また、左記のQRコードをバーコードリーダーで読み込むことにより、携帯電話からもご覧いただくことができます。

（林業課　林産振興担当）

みんなの林政

佐賀県内における原木しいたけ生産の取り組み

○研究会の設立

佐賀県では、原木しいたけ栽培に関する研究及び技術の向上、生産者相互の親睦と経営の改善を図ることを目的として、平成18年12月5日「佐賀県原木しいたけ栽培研究会」が設立されました。

研究会は県内のしいたけ生産者47名、関係3農協（ＪＡさが、ＪＡ唐津、ＪＡ伊万里市）、県森林組合連合会、富士大和森林組合、神埼郡森林組合、日本きのこセンターで構成されており、研究会活動は、県内のしいたけに関して情報交換を行う大変良い機会になっています。

○研究会の活動状況

研究会では、栽培技術向上のため技術研修会を年に3回（夏1回、秋２回）開催したり、県しいたけ品評会へ参加し、生しいたけ、乾しいたけを多数出品しています。

また、地産地消の取組みとして(財)佐賀県学校給食会へ乾しいたけを納入し、県内の小中学校での給食に利用されています。納入量は、納入を開始した平成15年度は100kg足らずでしたが、平成19年度は1.2トンと大幅に伸びており、研究会としても学校給食に全量佐賀県産しいたけを利用してもらえるように生産努力をされているところです。

秋の先進地研修

学校給食会納入品の集荷検査

○しいたけの生産状況と市況

佐賀県での原木しいたけ生産量は、約200トンでほぼ横ばいの状況ですが、以前のような高い単価に戻ってきている乾しいたけは、平成19年の3.6トンに対して、平成20年上半期で4.7トンと大幅な増加傾向にあります。特に最近では、食の安全安心の高まりから全農市場でも国産乾しいたけの人気が出ており、5,000円/kgを超える単価で取引されることも珍しいことではなくなってきました。

○しいたけ栽培を始めてみませんか

これまでご紹介しましたように、県内の原木しいたけ生産者で組織する研究会が発足したことで、会員間での栽培技術など多くの情報交換が可能となりました。また、全農市場で国産の原木しいたけが高い評価が得られていることなど、しいたけ栽培を始めるには良い環境が整いつつあります。研究会では、会員を増やしていきたいという意向がありますし、最近では、定年後にしいたけ栽培を始めた方もおられます。地域にあるクヌギなどの原木を利用し、森林の整備を行って、しいたけ栽培をすることは、中山間地域の農林家の貴重な収入源にもなります。県単補助事業や融資制度の活用を検討するなど、みなさんも今一度しいたけ栽培に目を向けてみてはどうでしょうか。

（林業課　林産振興担当）

みんなの林政

「森林の間伐等の実施の促進に関する特別措置法」が制定されました。

森林は、国土の保全、水源かん養のほか、二酸化炭素の吸収源として重要な役割を果たしています。

しかしながら、近年、森林を支える林業・山村の活力が衰退し、間伐等の手入れが不足する森林が増えるなど、森林の機能の低下が危ぶまれています。将来の森林づくり、地球温暖化の防止に向け、地域にとってかけがえのない森林を健全に育てることが必要となっています。

このような中、京都議定書の第一約束期間の終期である平成24年度までの集中的な間伐等の実施の促進を図るため、「森林の間伐等の実施の促進に関する特別措置法」が、平成20年5月16日に交付・施行されました。

この法律では、農林水産大臣が間伐を推進するための「基本指針」を策定し、これに即して、知事が「基本方針」を策定します。さらに、市町長が、「特定間伐等促進計画」を策定することにより森林整備事業における優遇措置や交付金の交付が受けられます。

特定間伐等促進計画を策定することにより、受けられる優遇措置等

○計画に基づき造林事業を実施する場合、保安林の場合と同水準の助成（68％）を受けることができます。

○伐採届出の提出が不要となります。

美しい森林づくり基盤整備交付金の概要

支援対象は、間伐、造林、このための作業路網の整備など、特定間伐等の促進に資する幅広い取り組みです。

○補助率は２分の１です。

○事業主体は、市町村、森林組合、森林整備法人、素材生産業者、NPO法人等事業主体に制限はありません。ただし、市町が立てる計画に位置づけることが必要です。

○間伐の対象林齢に制限はありません。

（林業課　間伐造林担当）

普及だより

唐津・東松浦地区の林業普及の取組

1　管内の森林の状況

1市1町からなる唐津管内の森林面積は、約25,900haで、森林率は53％と県平均45％よりやや高い状況ですが、林業地域である七山・厳木地域から虹の松原を含む玄海国定公園の海岸線の防風機能等を持つマツや広葉樹等の多様な森林が保持され、民有林の人工林は64％と県平均67％よりやや低くなっています。

2　現状と課題

管内では、平成10年に5森林組合が合併し、現在2組合で森林整備を進めていますが、材価の長期低迷等に加え、相次ぐ台風災や雪害により所有者の経営意欲が更に低下し、間伐等の手入れが進んでいない状況にあります。

特に管内の西に位置する上場地域は、ヒノキ等の人工林が約900ヘクタールあるにも拘わらず、森林組合の事業区域外であることから、殆ど造林事業に取り組まれていません。

今後、手入れ不足の森林の増加が懸念されるため、森林組合の体質強化による事業区域の拡大や、林産事業の拡充による森林所有者への利益還元を進め、森林所有者の森林管理意欲を高めることが必要だと考えられます。

3　普及指導の取り組み

（1）上場地域の森林整備推進

上場地域の殆どが造林事業の活用が無いことから、今年度から造林事業（里山エリア再生交付金）の助成が受けられるように、唐津市と玄海町の共同で計画を変更し知事の認定を受けました。

これを契機に、生産森林組合を中心に森林整備が進むよう唐津市や玄海町と共に補助事業等の推進を図ります。

（2）利用間伐の推進

管内の森林組合では、平成19年度にスウィングヤーダ１台を導入し、20年度にプロセッサ２台の高性能林業機械導入を計画しています。機械を活用した低コスト施業により利用間伐を進め、所有者に収益を還元できる体制を整備し、森林組合の施業受託が一層進むよう支援して行きたいと考えています。

林業機械による搬出

（3）森林組合の経営基盤強化

管内の2森林組合では、「森林組合改革プラン」の中で、組織基盤強化のため森林組合合併を検討しています。

私どもも、組合員の山や地域の森林整備を進めていく為には、上場地域まで事業区域を拡大するとともに、作業員の充実と安定した雇用が必要だと考えています。

このため、2組合間での造林事業等事務事業の統一や意見交換会等により、合併を見据えた取り組みを進めたいと考えています。

林道に置かれた間伐材

利用間伐後の森林写真

（唐津農林事務所　林務課普及担当）

普及だより

伊万里・西松浦地区の林業普及の取組
～伊万里・西松浦森林業再生プロジェクト展開中～

1　管内の森林・木材産業等の現況

「成熟した資源、日本有数の木材コンビナート」

当管内の民有林は、森林面積1万5千ｈａのうち、スギ・ヒノキ人工林が9千5百haを占めており、その中でも36年生以上が6千haと、約65％が収穫時期を迎えています。

また、日本有数の規模を誇る伊万里木材コンビナートに向けて、九州各地からラミナ用原木を積んだトレーラーが行き来しています。

伊万里木材コンビナート

2　現状と課題に対する取り組み

「とにかく団地化・利用間伐を進める」

「伊万里・西松浦森林業再生プロジェクト」は、「団地的な森林整備を進め、成熟した木を収穫し金に換えよう。」という取り組みです。

まず、公民館を会場とした「山のなんでも相談窓口」で、森林組合職員が利用間伐作業の見積を記した「森林プラン」を所有者に説明し、5～10ha規模の利用間伐団地を設定します。そこから伐り出す並材は、ラミナ用原木として有利な価格で伊万里木材市場に出荷し、間伐材収入を所有者へ還元します。

さらに、利用間伐技術の向上のため、森林組合職員を対象とした毎月の技術検討会、所有者を対象とした研修会等を開催しています。

間伐の必要性や森林プランの説明

毎月の技術検討会（低コスト作業路）

3　今後の取り組み

「間伐で木（金）を生み出す」

当管内では、36年生以上の人工林を10年に１回利用間伐するとしても、年間に600haもの間伐可能な成熟した資源があります。

また、これまでの団地実績から、間伐材は１ヘクタールあたり約50㎥程度生産可能です。

例えば、年間に間伐対象量の半分300haを利用間伐すれば、1万5千㎥以上の間伐材が生産でき、1億5千万円以上の素材売上を生み出せる「宝の山」が、私達の目の前には広がっています。木を捨てずに山から木を生み出す取り組みにより、山で働く機会も増え、それに関係する林業・林産業等の地域産業も活気づきます。

しかし、管内の間伐実施量は年間100ha程度と資源に対し十分ではなく、まだまだ安易に切り捨てられたままになっている山が多いのも現状です。

今後とも、市町、森林組合、農林事務所が一体となって、間伐材生産を念頭に置いた計画的かつ合理的な森林管理という課題解決に向け、団地化の推進、効率的な作業路の開設、プロセッサ等の高性能林業機械の整備、森林評価員や現場職員の技術向上等に取り組みます。

利用間伐団地内での作業

（伊万里農林事務所林務課普及担当）

普及だより

鹿島地区緑の少年団研修交流大会が開催されました

平成20年9月27日（土）に鹿島市蟻尾山公園において、鹿島管内の緑の少年団8団体、約120名の参加による「H20鹿島地区緑の少年団交流研修大会」を開催しました。

美しい緑の郷土づくり県民運動の鹿島地区推進協議会長でもある桑原鹿島市長のあいさつのあと、8月に北山東部小学校で開催された「佐賀県緑の少年団活動発表大会」で、鹿島藤津の代表として発表された「嬉野市不動山緑の少年団」の活動発表後に、各少年団の代表から日頃の活動や構成等について紹介してもらいました。

今回の研修大会では、他の少年団と交流を深めてもらうために１班11名程度で10班に分けて、葉っぱウォークラリーや木の名札の設置、葉っぱや草を入れて楽しむ万華鏡づくりを行いました。

【葉っぱウォークラリー】

ＮＰＯ「みんなの森林プロジェクト」の吉村剛さんの指導による、木の名前に関するクイズに答えながら木の名前を答えていくラリーを実施しました。

蟻尾山公園の花見広場には、たくさんの木が植えられており、その中から10本の木について問題を出しました。まず、子供達はチームで木偏のつく漢字を10個書き終えた班から出発し、木に触ったりしながらクイズの答えを考えて、元気にラリーをしていました。また、ラリーの途中では顕微鏡でススキやヨモギの葉っぱの観察も行いました。

【木の名札設置】

午後からは、クイズに使った10本とあと10本をくわえて20本に名札を付けてもらいました。くじ引きで順番を決め、葉っぱのシルエットを見ながら各班2本ずつに名札を付けていきました。

【万華鏡づくり】

万華鏡に自然のものを入れて観察することでいろいろな気付きをしてもらい、自然に興味を持ってもらうために万華鏡づくりに挑戦しました。

中に入れる材料の違いでいろいろな見え方をするので、他の人と交換しながら見て喜んでいました。

当日は秋晴れの中、緑の少年団の皆さんには他の団員との交流をしてもらい、さわやかな一日を過ごすことができました。

最後に今回の研修交流大会についてアンケートを行いましたが、「また参加したい」と約４割の方が答えてくれました。

今後、アンケートの結果を生かして研修交流大会の内容、開催時期等について検討していく必要があると思いました。

（鹿島農林事務所　普及担当）

この町この人　「竹炭匠人」吉永喜代美さん

嬉野市塩田町で「匠工房竹炭釜」を経営し、竹炭等の生産・販売をされている吉永喜代美さんを紹介します。

吉永さんは、東京にお住まいでしたが、10年ほど前に病気で倒れ、2年間の闘病生活を送った後車椅子の生活となり、実家の嬉野市塩田町に戻ってこられました。

そして、お父さんが竹炭を生産されていたことがきっかけとなり、品質のより良い竹炭を生産するために、インターネットや書籍で「炭焼きの方法」について勉強し、簡易蒸留器などの機械も自分で考えて作成され、竹炭と竹酢液の生産と販売を行う「匠工房竹炭釜」を経営されています。

「匠工房竹炭釜」

吉永さんの炭釜には、県内をはじめ、宮崎県からも視察にこられているそうですが、機械装置はまねできても販路を作ることができず、うまくいかないケースが多いそうです。

吉永さんは、インターネット販売を中心に販売されており、良質な炭と竹酢液を一般的に販売されている価格より安く提供されていることから口コミで注文が増え、全国から注文があるそうです。

なお、嬉野市のJA直売所等でも販売されています。特に農業での土壌改良用の炭、害虫等忌避等用の竹酢液、住宅での床下調湿用の炭等が多く売れているとのことでした。

「ＪＡの直売所に陳列された商品」

また、原料となる孟宗竹の買い取りもされており、軽トラック一台分で約4千円になるそうです。孟宗竹は、4年以上（節の溝が黒くなっている）ものが良く、夏に伐採された竹は虫が付きやすいので、冬に伐採してほしいとのことでした。

竹は、木材と同じように再生可能な自然環境にやさしい循環素材として活用が期待できます。

現在、県内の里山等では放置竹林が問題となっています。「竹炭づくり」が放置竹林の問題の解消と新たな地域振興の方法として地域活動の中に定着し発展することを期待し応援したいと思います。

インターネットで「匠工房竹炭」と入力して、検索するとホームページが見られます。

色んな商品があり、購入することができますので是非ご覧ください。

（鹿島農林事務所　普及担当）

「森の名手・名人」に認定されました。

社団法人国土緑化推進機構が「もりのくに・にっぽん運動」の一環として実施している「森の名手・名人」の選定事業において、森のめぐみ部門の生業「シイタケ栽培」で、県から推薦していた唐津市相知町の中山茂廣さんが認定されました。

中山さんは、「おいしい本物のしいたけ」を求めて、原木栽培にこだわり、細部まで行き届いた徹底したほだ場管理により高品質の「原木しいたけ」生産を確立されました。

平成19年度まで「佐賀県原木しいたけ栽培研究会」の会長をされ、また、現在も会の先頭に立って原木しいたけ生産推進と消費拡大に活躍されておられます。

（さが緑の基金　事務局）

林業試験場だより

「マイクロカッティングによる新さし木生産技術普及講習会」が開催されました。

去る、9月16日に、佐賀県山林種苗緑化協同組合（苗組）が主催する同講習会が林業試験場で開催されました。マイクロカッティングとは聞きなれない言葉ですが、簡単に言えば超小型のさし穂を利用した新しいさし木技術のことです（マイクロ＝超小型、カッティング＝さし木）

近年、東京や大阪をはじめ都市近郊では、山林のスギを伐採して少花粉スギへ植え換えることで花粉の飛散量を抑える取り組みが急がれていますが、肝心の少花粉スギや無花粉スギの苗木の生産が追いつかない状況に陥っています。そんな地域に少花粉スギ等の苗木を短期間に大量に供給することを念頭に、林木育種センターが開発した新技術として、今大変注目されているものです。

当日は、佐賀県苗組の呼びかけに応じて九州・山口各県の種苗生産者等を中心に８５名の参加があり、この技術への関心と期待の高さが伺えました。独立行政法人森林総合研究所林木育種センターの植田技術指導役を講師に、マイクロカッティングの基礎についての講義があり、次いで超小型さし穂の調整方法の実技やさし床の作り方、さしつけの方法、水やりの方法など一連の作業について実演を交えながらの丁寧なレクチャーが行なわれました。

今回の講習の一番のポイントは、超小型のさし穂の作り方にあるようです。県内で以前から行なわれてきたスギのさし木では、通常30cm程度のさし穂を利用しますが、マイクロカッティングでは10cm以下のさし穂を利用します。そのぶん、一つの枝から多くのさし穂が取れるわけですが、植田指導役によると、枝には「芯」がある枝と「芯」のない枝があり、「芯」のある枝だけをさし穂に利用することが大切だそうです。なお、「芯」のない枝とは枝性（えだせい）が強い枝であり、そんな枝をさし穂に使ってもいい苗木にはならないそうです。実際に講習参加者全員でさし穂作りを体験しましたが、「芯」のある・ないの見分け方は微妙で、こればかりは数をこなして慣れるしかないようでした。

国民の1割以上が花粉症になっているといわれる中、林業の振興と花粉症対策を両立させていくには、少花粉スギなどの普及は急務といえます。しかし、全国的にみると少花粉スギの苗木は生産量が少なく、また簡単には増産しにくい状況にあります。マイクロカッティングはこのような状況を打開する切り札的な存在といえるかもしれません。

佐賀県内では、これまで7品種の少花粉スギが選抜されており、それらの苗木生産も行われていますが、PR不足もあってかあまり普及していませんでした。今回の講習会を期に、もっと多くの少花粉スギの苗木が生産されるようになると期待されます。

佐賀県苗組では、マイクロカッティングで生産した少花粉スギの苗木を県外へ売り出すことも視野に入れているそうです。佐賀生まれの少花粉スギが多くの場所で植えられることで、花粉症に苦しむ人が減ると同時に、林業の振興に役立って欲しいと切に願っています。

（林業試験場　普及指導担当　宮崎潤二）

トピックス　第4回 がばいじゃーもく祭りが開催されました

去る10月5日(日)に、県木材協会と(株)伊万里木材市場主催、佐賀西部流域森林・林業活性化センター等の後援により伊万里木材市場特設会場において「第4回がばいじゃーもく祭り」が開催されました。

この企画が始まって、今回が4回目となり、昨年から名称を「がばいじゃーもく祭り」と変更されて、伊万里木材コンビナートの年中行事としてすっかり定着したようです。

イベントコーナーでは、ふれあい木工教室、森林のクイズ大会＆ビンゴ大会、スタンプラリー、魚釣り大会、木の実でアート、つみ木あそび、チップ広場といった「木」を使って、触って、木の知識を楽しく学べる企画がたくさん用意され、展示コーナーでは、県木材協会による佐賀県産の優良材と製品展示、中国木材(株)による伊万里木材コンビナートのビデオ映像紹介、伊万里農林高校生徒による手作りアルプホルンと木工作品の展示、佐賀県の森林PRなど、多彩なブースが設けられ、それぞれ特色のある内容で祭りを盛り上げていました。

伊万里農林高校生による手作りアルプホルンと木工作品

その他にも、地元で採れた農産物や海産物の特設販売がなされ、餅つき大会では、参加者にあん餅が振る舞われました。

ふれあい木工教室では、スギの角材や板に加え、中国木材(株)や西九州木材事業協同組合から提供されたラミナ材や集成材の端材などで、椅子やテーブル、本棚、さらには、犬小屋等、素敵な作品がたくさんできあがっていました。

ふれあい木工教室

子どもたちに人気だったのが「木の実でアート」の企画でした。クヌギやコナラのどんぐりや小枝を使っての鳥や動物の作品、松ぼっくりを使ったクリスマスツリーなど、親子で思い思いの作品づくりに没頭されていました。

「チップ広場」では、西九州木材事業協同組合が準備した大量のチップの中から宝を探しあてる宝探しゲームが行われたり、NPOビッグリーフ出展の「つみ木あそび」では高さを競いあうように積木のビルディングを作って遊ぶなど、子供たちの元気な声であふれていました。

つみ木あそび

当日は、朝から雨が降り出し、参加者の出足を気にしていましたが、約600人の参加があり、昨年の700人に及ばないもののまずまずの盛況で終わることができました。

イベントも盛りだくさんの内容で、親子連れの家族が楽しめる企画が充実しているように感じました。また、次回の開催については、まだ検討中ということですが、今後もこのように木とふれあうことができる楽しい企画が開催されることを期待します。

(林業課　林産振興担当)

佐賀の木材市況（平成20年度）

区分	樹種	寸法 径(厚さ) cm	寸法 長さ m	等級	20年 7月 価格 円/m³	20年 7月 増減 (対前月)	20年 8月 価格 円/m³	20年 8月 増減 (対前月)	20年 9月 価格 円/m³	20年 9月 増減 (対前月)
丸太	スギ	14～16	3	並	11,100	900	11,200	100	11,100	-100
		18～22		〃	11,400	800	11,500	100	11,600	100
		24～28		〃	11,500	1,400	11,500	0	11,300	-200
		30～		〃	11,900	1,100	11,700	-200	11,700	0
		14～16	4	〃	10,400	800	10,300	-100	11,400	1,100
		18～22		〃	11,700	1,000	12,000	300	12,300	300
		24～28		〃	12,400	1,600	12,600	200	12,600	0
		30～		〃	13,000	1,100	13,200	200	16,500	3,300
		14～16	6	〃	14,900	700	15,300	400	13,800	-1,500
		18～22		〃	14,900	0	15,400	500	14,600	-800
		24～28		〃	14,800	-500	15,700	900	16,000	300
		30～		〃	－	－	－	－	23,500	－
	ヒノキ	14～16	3	〃	14,700	2,000	13,900	-800	14,500	600
		18～22		〃	15,100	1,100	15,700	600	18,000	2,300
		24～28		〃	21,900	5,100	20,800	-1,100	22,000	1,200
		30～		〃	38,300	－	33,300	-5,000	25,800	-7,500
		14～16	4	〃	19,400	600	21,200	1,800	22,200	1,000
		18～22		〃	20,200	2,000	20,400	200	22,800	2,400
		24～28		〃	20,800	1,900	22,300	1,500	22,600	300
		30～		〃	28,300	－	32,000	3,700	28,000	-4,000
		14～16	6	〃	30,700	-2,300	30,000	-700	26,000	-4,000
		18～22		〃	30,700	-4,500	30,000	-700	35,500	5,500
		24～28		〃	51,300	22,600	43,700	-7,600	33,000	-10,700
		30～		〃	－	－	－	－	55,000	－
製材品	スギ	10.5×10.5	3	特1等	30,000	0	30,000	0	30,000	0
		12.0×12.0		〃	30,000	0	30,000	0	30,000	0
		10.5×10.5	4	〃	24,500	0	27,000	2,500	27,000	0
		12.0×12.0		〃	24,500	0	27,000	2,500	27,000	0
	ヒノキ	10.5×10.5	3	〃	55,000	0	55,000	0	55,000	0
		12.0×12.0		〃	55,000	0	55,000	0	55,000	0
		10.5×10.5	4	〃	43,000	-2,000	45,000	2,000	45,000	0
		12.0×12.0		〃	45,000	0	45,000	0	45,000	0

※ スギ・ヒノキ丸太（７～８月）：佐賀木材（株）、（協）唐津木材市場、（株）伊万里木材市場、佐賀県森林組合連合会木材共販所の平均価格
スギ・ヒノキ丸太（９月）：（協）唐津木材市場、（株）伊万里木材市場、佐賀県森林組合連合会木材共販所の平均価格
スギ・ヒノキ製材品：（株）伊万里木材市場

頑張っています林業研究グループ「三瀬林業研究会」

三瀬林業研究会は、昭和54年に発足以来30年の長きに亘り活動を継続している林業研究グループです。佐賀県の代表的林業地三瀬村を活動の拠点としており、県の林業研究グループ活動のリーダーとして先頭に立って頑張ってきました。会員は、現在13名、「会員相互の親睦と、林業に関する新技術知識の習得や情報交換、自らの林業経営の実践に努めることで、地域振興に寄与する」ことを目的に活動を行っています。

会の活動を継続するに当たっては、毎年会員が集まって資金獲得活動の計画を立てており、昨年度は佐賀市の市有林の下刈り作業を行いました。

林業技術の習得については、九州大学の先生を招いての講習会の開催や三瀬村の育林コンクールへの参加、設立10周年記念に京都の北山林業での研修、設立20周年記念に屋久杉視察など中身の濃い研修を実施してきました。

また、今年で25回目となる「田舎と都市のふれあいまつり」には県境を越えて毎年福岡市からたくさんの来訪者がありますが、三瀬林業研究会で「丸太積木競争」や「ダルマ落し競争」等の企画を持って参加し、三瀬林研の活動をPRしました。

今、会のメンバーも設立当初の林研の仲間がほとんどで、若いメンバーがなかなか増えない状況です。森林所有者は当然ですが、林業を経験したことがない人へも林業研究グループの仲間の加入を呼びかけています。

（林業課　専門技術員）

佐賀県
http://www.pref.saga.lg.jp/

編集後記

アメリカのサブプライムローンの不良債権化を発端とする金融不安は、ますます世界同時不況の様相を呈してきているようです。連日マスコミ等で株価の動向が報道され、これからの経済の先行きに大きな不安を与えています。住宅着工数の減少など林業・林産業界に少なからず影響がありそうです。（T.F）

平成20年11月1日発行　編集・発行●〒840-8570　佐賀市城内1丁目1番59号 佐賀県林業課・佐賀県林業改良普及協会